

✿✿✿✿✿ 若いお母さんたちへ ✿✿✿✿✿

## 初めての道具との出会い

——祐子一歳～二歳の頃——

はるにれの会

小薦江 幸子

昭和六十二年一月、三十三歳で私は待ち望んだ“母”になることができました。それまでの七年間の幼稚園勤めで、待つことの大切さや、子どもの心を信頼してかかることのすばらしさを、児童達から教えてもらいました。今度は、やっと我が子を育てる立場に回ったわけですが、大きなところは違わないよう思えてきた今日この頃です。

今回は、娘・祐子の成長と、身近な道具との関わりと、いう点について気がついたことを書いてみました。満九か月頃から、二歳位までの様子です。親として、どう関わっていいのかわからなかつた事、やりすぎた事、間違えたこと、中断して保留にしたことなど、様々あるわけ

ですが、子どもの方は、そのような事柄をまるごとバネにして、あるいは自然に備わった力で、不可能を可能に

しながら、どんどん成長していく姿に接していると、あたかも、親の拙なさや、無力さへの“許し”とでも言えるようなものを、身をもって示されているように感じます。あらためて、子どもは天からの授かりもの、預りものという考え方には、深く納得するところもあります。

### 一、スプーンとの関わり

満八か月頃から、フォークにつき刺したじゃが芋やトマトを、握って食べていたが、九か月になって、自分でつき刺して食べようとするようになった。スプーンについては、フォークほどそれを大人が使っているのを見るのは頻繁ではないのに、手をのばして持ちたがる。みそ汁や煮物の中に入れて、食物がたいして付着しないのに、一滴か二滴の汁をしゃぶっては満足している。もちろん握りばしと同じで、小指の方からくぼみが出ているので、水平の状態で口まで運ぶことはなく、必ず口の前

でくぼみは上下がひっくり返っている。

育児書でみつけた方法で「母子同じ方向にむかい、スプーンを持った母の手の小指を子どもに握らせて口に運ぶ」というのを試みたが、自分で食べるという感覚から離れてしまうためか、スプーンは、いつもみごとに奪い返されてしまった。どのように教えたらスプーンが使えるようになるものか、私は考えるのが面倒になってしまった。それで、ポタージュやヨーグルトなど、スプーンに付着しやすい食べ物で使わせてやるようになら、相変わらず、くぼみに液体は入らなかつたが、スプーンをしゃぶり回しながら自分で時間をかけて食べ、精神的な満足は満たされている様子だった。たまに半圆形のゼリーやカスタードプリンを与えると、数度に一度、スプーンで口まで運べることがあり、あとは手でひろって食べて、大変に満足している。一歳三ヶ月をすぎた頃、牛乳やお茶をスプーンですくって飲もうとするようになってしまった。親としては、行儀の悪いことだからやつて欲しくない事である。けれども、もし、この機会を逃した

らスプーンの上達に意欲がもてない子どもになってしまったのでは……とも考えた。そこで、意図的に飲み物を無駄にするのでなければ、やりたいだけさせてみることに覺悟を決めた。砂場の砂や水でさせればよい事と、割り切って考えなければならない事だったかも知れない。しかし、

“うそつこ”の世界の砂場と、実際に口に運ぶ飲み物に対してでは、真剣味が違ってくるのでは……などとも思った。子どもに甘い親の単なる言い訳かも知れないとも思つた。

満二歳になった今、スプーン、フォークとも、ほとんど大人とかわらない程自由自在に使いこなしている。危険のないように、乳児用のポリエチレンのフォークは先が鋭くないのだけれども、フォークとしての使用価値はない、私は思った。先の鋭い金属のフォークを使わせていいかないと、つきさして食べるというような使い方はいつまでたつてもできない。先のあまいフォークは、ラーメンやそばを食べる時だけ使用価値があった。ゼリーやブディングをすくう時にも金属製のうすいスプーン

の方が、使いやすいと私は思う。又、さかのぼって、離乳食を与えるころに使うスプーンは、ティースプーンのようなくぼみの物でなく、アイスクリーム用の平たい物の方が、すっきりと食べ心地がよいように思えた。

## 二、クレヨン、サインペンとの関わり

祐子が、最初に手に持つて書こうとしたのは、鉛筆だった。丁度、満一歳の頃のことである。大人が日常使っているボールペンや鉛筆をまねて使ってみたかったのだろうと思う。多色の方が楽しさがひろがると思い、色鉛筆を持たせてみたが、鉛筆ほど鮮明に線が出ないし、書き味も重くてあまり快くない様子で、普通の鉛筆でばかり書きたがった。色鉛筆は箱に出し入れするきれいなおもちゃになってしまった。

クレヨンの方が、書き味が軟らかいだろうと思い、与えたが、やはり書くよりも、おもちゃ箱や他の入れ物に出し入れすることを楽しむ様子であった。このような使い方には、私は感覚的にみすごす気にならず、すぐにか

くして、存在を忘れさせてしまった。

次に、カラーサインペンを出してみた。色は鮮明で、書き味は軽く、鉛筆に勝る楽しさを味わわせられるはずであった。一歳二か月の祐子は、サインペンのきれいなふたを次々とはずすことに興味が集中し、書く道具として使うところまでいかない。描く道具は、鉛筆一本で充分、としばらく思うことにした。

一歳八か月ごろになって、鉛筆でのなぐり書きも、腕を使つてぐるぐると輪がかけるようになってきた。見ている私の方が更なる刺激が欲しくなり、又、クレヨンを出してみた。クレヨンを使ってぐるぐると楽しく描けるようになつたが、紙をむいたり、クレヨンを折ることに興味を持ち、物を大切に使わせたいと考える親側の要求とはますます入れ合わなくなり、又してもクレヨンはとり上げ、かくしてしまった。

カラーサインペンについては、軽い書き味と鮮やかな

色味が、ますます自由に書きなぐる楽しみを増幅した様子で、緩急、大小、描く曲線も複雑に、色どり豊かにな

ってきた。前回の試行錯誤のかいがあつて、かきおわつたら、自分でキヤップをはめておくことが自然に身についてしまったようだ。これは想像以上に楽しいことで、親子ともに、余計なことに神経を散らさずに描くことを楽しめるのは二倍の喜びだったようと思う。

一歳で線がきを始めて、二歳直前でもまだあきず直線、曲線、円、などをかいて楽しんでいた。その楽しみ方にエネルギーの衰える様子もないで、やりたいだけやらせてみたいと考え、ことばかけの方は、「きれいね」「元気にかけたね」程度の、描いた線についての共感にとどめていたのだが、たまたま、祐子の祖母が、「いつしょにかきましょねえ」と言いながら、祐子のかいた曲線を斜線でぬり分けて、「咲いた、咲いた、チユーリップの……」と歌い出し、祐子の描いた曲線がきの絵は、たちまちチューリップに変身してしまつたのであ

る。

私はそれまで、祐子の目の前で、意味のある形を描いてみせることを避けてきていた。「自由に線がかけて樂

しい」という今の楽しみ方に對して、「お母さんように形がかけない」とか「自分のイメージしたような形がかけない」というような高度な雑念で、今の充実をこわしてしまいたくなかったからである。

祐子はそれ以来、「咲いた、咲いた」と歌いながら、相かわらず曲線を描いているが、時々、「みかん！」とか、「ブーブー！」とか、それらしいものを命名することも出てきた。それ以上に、私にとつて新しい発見だったのは「一緒に書こう、一緒に書こう」とせがまれて、一枚の紙の上で、祐子は相かわらずの曲線の遊び、私は新幹線や鳥をかいていても祐子は、「ポッポだね！」「シンカンゼン！」と喜ぶだけで、自分のと比べて、どうかなどは全く思っていないらしいということだった。この経験のおかげで、私は少し自由になり、砂場でも、ままで風の遊びをしている祐子のそばで、穴を掘ったり、トンネルをつくったり、ということが平氣ができるようになつた。よほど興味が高まってきた時でないと、手を出しに来ないし、自分の関心事に没頭してい

るからである。祐子への信頼感がひとつ進歩したような気がする。

もとにもどるが、二歳一か月の今、線がきの楽しみから、自分のつくったものからイメージを生みだそうとして変わつてきている現在を、いとも簡単にかけぬけていく様子をとらえることができて、楽しかつた。できることなならスカートの裾をつかまえて、「もつとゆっくり歩いて、お母さんによく見せてよ」と、言いたいぐらいだ。

二歳一か月の会話。「すてきなチューリップかけたね。葉っぱをつけてあげよう。」「ちがうよ。これ、チューリップでない！」もう少しすると、自分でイメージを持つて描こうとするようになるのでしょうか。とにかく、今は、祐子が表現したものから受けるイメージを、こちらも口に出して表現してみてもいいのだな、その許可のサインが「ちがうよ」という強いことばに表われたのではないか、と思えるのだ。

### 三、歯ブラシと風邪薬

前述したスプーンにてもクレヨンにても、祐子の心の動きや手指の器用さに合わせて、大した無理もなく生活の中に取り入れて来られたようと思うが、歯ブラシと、とりわけ、風邪薬は、突然、生活の中に飛び込んで来た。歯ブラシについては、歌を歌いながら、あるいは親と交互に磨かせ合うなど、いやがる祐子を、無理に納得させて磨いてきた。ところが、満二歳で、流感に感染し、いやがるシロップ薬を無理に口に流し込んだ時から、飲み薬と歯ブラシに対して、全力での抵抗をしてくるようになつた。いろんな手をつくしてみたが、口に含んで、薬ということがわかると、吐き出している。鼻をつまんで流しこむより以外に方法がないと思った。幸いすぐ熱は下がり、薬も四日ほどで終わつたが、歯ブラシの方は今でも毎晩、親子で修羅場を演じている。食後の口すすぎの方だけは好んでするので、夜の歯みがきが充分でなくとも、あまり深刻にならないようにしているが、このような苦しみを通りぬけてこそ、自分できちんと

と磨けるようになった時の喜びは大きいであろうか。待ち遠しいと思う。

ふり返つてみて、このように、子どもとの対立を気にして問題視するような私の養育態度の方がおかしいのではないか、必要なことは、きつぱりと実行して、あとは気分転換を上手にさせる方が健康的な暮らし方ではないかなどあれこれが去來し、このように正直に書きならべて来たことが、単に私個人の保育技術の拙なさを暴露しただけのことのようにも思う。

十七年前、児童学科の入試に臨んだ時、確か、小論文のテーマのひとつが、「保育者とは、萌え出たばかりの新芽を愛でる人」というような考え方をどう思うか、といつた内容だったようと思うのだが、入学の門をたたいた受験生に対して、このようにまつとうな問い合わせをされたものだった。今、当時の約倍の年数を生きて、その小論文に課された事が、今、多少なりとも私の血肉となつて、身をもつて理解しつつあること、実践に臨んでい

ることを、たいへんありがたく幸せなこととかみしめて  
いる。

昨今はまた、国民にとっての天皇制についての議論が盛んで、戦争責任論も往々かっているが、四十年前、戦争にむかっていた時代に、良心的な保育者が、どのようにして芽達を守り、どのような苦しみの中で子供達の未来の姿を見通していくかのだろうか、というようなことを、今に生きる私達は知る努力をしなくてはならないようだ。眞に芽を愛でる人になるためには、社会に対しても、歴史の過去・未来に対しても、よく見きわめながら、芽達を守り育てる社会的な役割も担つていけるようではなくてはならないと自戒している。



### 「あいさつ

この五月号が皆様に読まれている頃、私はオランダ、アムステルダムの郊外アムステルフェンで、夫と娘と三人で新しい土地での毎日を緊張の中で始めていることでしょう。

「暗い森の中をお母さんと手をつないで歩いている夢を見たよ。やさしい男の人の声が『もうすぐオランダだよ。』って教えてくれるの。」娘みづきの話です。オランダで小学一年生を迎える期待と不安でいっぱいの娘との生活も報告したく思つております。

わずか一年三か月しか「幼児の教育」編集に携われませんでしたが、当誌を愛していらっしゃる多くの方々と接することができ、幸せな日々でした。長い歴史を持つこの「幼児の教育」誌が、今後とも多くの読者に支えられ、より発展なさることを、心よりお祈り申し上げます。